

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2024 年度 郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部

一 般 選 抜 I 期

個 別 学 力 試 験 問 題

国 語

(国語総合)

注 意 事 項

- 1 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁等に気付いた場合は、監督者に知らせてください。

志 願 番 号		氏 名	
---------	--	-----	--

解答は、すべて解答用紙に記入すること。

問題Ⅰ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

見えない人が「見て」いる空間と、見える人が目でとらえている空間。それがどのように違うのかは、一緒に時間を過ごす中で、ふとした瞬間に明らかになるものです。

たとえば、木下路徳さん（注1）と一緒に歩いているとき。その日、私と木下さんは私の①キンム先である東京工業大学大岡山キャンパスの私の研究室でインタビューを行うことになっていました。

私と木下さんはまず大岡山駅の改札で待ち合わせて、②コウサテンをわたつてすぐの大学正門を抜け、私の研究室がある西9号館に向かって歩き始めました。その途中、一五メートルほどの緩やかな坂道を下っていたときです。木下さんが言いました。「(A)大岡山はやつぱり山で、いまその斜面をおりているんですね」。

私はそれを聞いて、かなりびっくりしてしまいました。なぜなら木下さんが、そこを「山の斜面」だと言ったからです。毎日のようにそこを行き来していましたが、私にとってはそれはただの「坂道」でしかありませんでした。

つまり私にとってそれは、大岡山駅という「出発点」と、西9号館という「目的地」をつなぐ道順の一部でしかなく、曲がってしまえばもう忘れてしまうような、空間的にも意味的にも他の空間や道から分節化された「部分」でしかなかった。それに対して、木下さんが口にしたのは、もっと

③俯瞰的で空間全体をとらえるイメージでした。

確かに言われてみれば、木下さんの言う通り、大岡山の南半分は駅の改札を「頂上」とするお椀をふせたような地形をしており、西9号館はその「ふもと」に位置しています。その頂上からふもとに向かう斜面を、私たちは下っていました。

けれども、見える人にとって、そのような俯瞰的で三次元的なイメージを持つことはきわめて難しいことです。坂道の両側には、サークル勧誘の立て看板が立ち並んでいます。学校だから、知った顔とすれ違うかもしれません。前方には混雑した学食の入り口が見えます。目に飛び込んでくるさまざまな情報が、見える人の意識を奪っていくのです。あるいはそれらすべてシャットアウトしてスマホの画面に視線を落とすか。そこを通る通行人には、自分がどんな地形のどのあたりを歩いているかなんて、想像する余裕はありません。

そう、(B) 私たちはまさに「通行人」なのだと思いました。「通るべき場所」として定められ、方向性を持つ「道」に、いわばベルトコンベアのように運ばれている存在。それに比べて、まるでスキーヤーのように広い平面の上に自分で線を引く木下さんのイメージは、より開放的なもの

に思えます。

物理的には同じ場所に立っていたのだとしても、その場所に与える意味次第では全く異なる経験をしていることになる。それが、木下さんの一言が私に与えた驚きでした。人は、物理的な空間を歩きながら、実は脳内に作り上げたイメージの中を歩いている。私と木下さんは、同じ坂を並んで下りながら、実は全く違う世界を歩いていたわけです。

彼らは「道」から自由だと言えるのかもしれませんが。道は、人が進むべき方向を示します。もちろん視覚障害者だって、個人差はあるとしても、音の反響や白杖（はくじょう）（注2）の感触を利用して道の幅や向きを把握しています。しかし、目が道のずっと先まで一瞬にして見通すことができるのに対し、音や感触で把握できる範囲は限定されています。道から自由であるとは、予測が立ちにくいという意味では④トクシユな慎重さを要しますが、だからこそ、道だけを特別視しない俯瞰的なビジョンを持つことができたのでしょうか。

全盲の木下さんがそのとき手にしていた「情報」は、私に比べればきわめて少ないものでした。少ないどころか、たぶん二つの情報しかなかったはずです。つまり「大岡山という地名」と「足で感じる傾き」の二つです。しかし情報が少ないからこそ、それを解釈することによって、見える人では持ち得ないような空間が、頭の中に作り出されました。

木下さんはそのことについてこう語っています。「たぶん脳の中にはスペースがありますよね。見える人だと、そこがスーパースペースや通る人だとかで埋まっているんだけど、ぼくらの場合はそこが空いていて、見える人のようにには使っていない。でもそのスペースを何とか使おうとして、情報と情報を結びつけていくので、そういったイメージができてくるんでしょうね。さっきなら、足で感じる『斜面を下っている』という情報しかないの、これはどういうことだ？ と考えていくわけです。だから、（C）見えない人はある意味で余裕があるのかもしれないね。 見えると、坂だ、ということまで気が奪われちゃうんでしょうね。きつと、まわりの風景、空が青いだとか、スカイツリーが見えるとか、そういうので忙しいわけだね。」

まさに情報の少なさが特有の意味を生み出している実例です。都市で生活していると、目がとらえる情報の多くは、人工的なものです。大型スクリーンに映し出されるアイドルの顔、新商品を⑤宣伝する看板、電車の中吊り広告……。見られるために設えられたもの、本当は自分にはあまり関係のない「意味」を持たないかもしれない、純粹な「情報」もたくさんあふれています。視覚的な注意をさらつていく目まぐるしい情報の洪水。確かに見える人の頭の中には、木下さんの言う「脳の中のスペース」がほとんどありません。

それに比べて見えない人は、こうした洪水とは無縁です。もちろん音や匂いも都市には氾濫していますが、それでも木下さんに言わせれば「脳の中に余裕がある」。さきほど、見えない人は道から自由なのではないか、と述べました。この「道」は、物理的な道、つまりコンクリートや土を固めて作られた文字通りの道であると同時に、比喩的な道でもあります。つまり、「こっちにおいで」と人の進むべき方向を示すもの、という意味です。

(注1) 全盲の視覚障害者(目が不自由な人)。

(注2) 白杖とは、視覚障害者が道路等を歩行するときに使う白い杖のこと。
はくじょう つえ

【一】傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。(二点×五＝十点)

【二】二重傍線部(A)「大岡山はやつぱり山で、いまその斜面をおりているんですね」との木下さんの一言を聞いて、筆者は驚いている。筆者が驚いた理由を本文中の語句を用いて答えなさい。(八点)

【三】二重傍線部(B)「私たちはまさに「通行人」なのだとそのとき思いました」について、次の二つの問いに答えなさい。

- (一) 筆者がいう「通行人」とはどういう人のことか。(三点)
- (二) 「通行人」は見えない人(視覚障害者)とは何が違うのか、本文中の語句を用いて答えなさい。(五点)

【四】二重傍線部(C)「見えない人はある意味で余裕があるのかもしれないね」との木下さんの一言について、見えない人(視覚障害者)が見える人よりも持っている「余裕」とは何か、本文中にある「情報」というキーワードを用いて答えなさい。(八点)

【五】次の選択肢のうちから、本文の主張と合致する内容のものを全て選び、記号で答えなさい。(四点[完全解答のみ])

- ア. 見えない人は、得られる情報は少ないが、それゆえ解釈する余裕があり、俯瞰的に空間全体を捉える見方ができる。
- イ. 大岡山駅改札から東京工業大学の筆者の研究室までは実際に急勾配こうはいの道が続き、「山の斜面」という表現に合致する。
- ウ. 見える人は、視覚的な注意を奪われる情報が身の周りにあふれているので、見えない人がするような俯瞰的に全体を捉えるのが難しい。
- エ. 「見えない人は道から自由だ」との筆者の言明は、物理的な道だけではなく、生き方にも迷っていることを指す。
- オ. 視覚障害者は見た目の美しさで「美人」であるか否か判断することがあると筆者は述べている。

問題Ⅱ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

理論と実践、抽象と具体の繋ぎの不確かさは、教育現場でもしばしば見ます。国から出た①シンシンにも、さまざまな研究者による論文にも、「なるほど、そうだ」と思う知見が確かにあります。しかし、それが、生きた子どもたちがずらりと居並ぶ日々の教室で、実際に、確かに、意味のある変革を生み成果をあげること結びついているか……。その②脆弱性はかなり深刻だと思っています。優れた理論が優れた実践と成果につながるという保証はない、ということ。大村はま③はその④大いなる弱点を現場人として痛感するからこそ、実践に徹するという姿勢を⑤ツラ又いたとも言えます。現実の厳しさを見切った結果でしょう。

たとえば、「聞く力を育成することが重要」というたいへんもつともな命題を前にした教員は、次のようなことをしがちです。

① 「よく聞きなさい」と命じたり、叱ったりする。

② よく聞いたかどうか、確認のテストをする。

③ おへそを相手に向けて座り（つまり正対し）、目を見て、頷くとよい、という指示をして、頷いたかどうかチェックする。

こういう取り組みが、果たして聞く力を本当に育てるのか。たとえば頷くことなど意識させたら、聞くことへの集中をかえって削ぐのではないか。相手の目を見て、頷いて聞いているようでも、実はまったく聞いてないで、別のことを考えている、というようなふだん自分でもやっていることを思い起こせばいいのに、「聞く力」を育成しようとやっていることから、きつと育成するだろうと思ってしまう。

逆方向（具体から一般化する場合）でも、不確かさはつきまといまいます。たとえば話し合うことの大切さを子どもに知らしめたいというのは、たいへん真つ当なことです。そのために日本中の教室でなにかにつけて話し合いをさせますが、そのまとめとして「今日の話し合いはどうでしたか？」という教師の問いに、子どもはまず間違いなく「お友達のいろいろな意見を聞くことができて、良かったです」というような返答をするわけです。

友達のどの意見のどの部分を、どのように捉えた結果、「良かった」というのか、それは④曖昧ですし、実はそんな実態などまるでないという可能性もあります。話し合えて良かった、という着地点が最初からあって、それをなぞっているだけであることが多い。望ましい結論が最初から期待されていることを、子どもはかなり幼い頃から理解していて、目の前のあれこれの具体的なものごとを自分の目で捉え理解する際に、知ってか知らずか、

(B) 大きな圧力を受けているのだと思わずにはいられません。期待された通りの抽象語を使って一般化するわけです。そういう内実を伴わない発言は、いうだけ空疎さを深めていきます。

理論と実践、抽象と具体を結ぶ線が実に不確かであること。帰納と演繹の往還のあり方が、おぼつかないこと。これは知を現実で生かす上で大きな弱点でしょう。そして、その弱点の根にあるのは、言語を扱う力と態度の不十分さ、精度の低さ、であると思われます。「国語が大事」というのは、

「日本語が大事」という以前の問題として、「言語が大事」。「言語教育」の部分こそが大きな役割を負うべきでしょう。

大村はまの国語教室は、近代の国語教育の中でおそらくもつとも成果をあげた一つです。しかし、大村の仕事の成功を支えた理論や理念は、実はそれほど驚くような特別のものではないかもしれない。そう思うようになりました。誰もがわかつているような、ごく当然のこと——一人前の言語生活者に必要な資質を丹念に育て鍛えていくために、保守的とも言えるくらい当然のことを、一つひとつ丹念に真正面から捉え、具体に移し、実行し、実現した。それをやり遂げた⑤「デジワ」の専門性、無数の知恵と見識こそ、注目すべきなのでしょう。「教える」ということは、望ましいことを皆の前で述べ、「理解しなさい」「覚えなさい」と命じ、成果を検査し、序列をつける……そんなことではない。望ましいその力を、必要な時に実際に使えるような形で身につけさせる、そこまで含めて「教える」なのだ、という専門家としての覚悟がそれを支えました。

今から二三〇年ほど前、エジプトの王都アレクサンドリアで、幾何学の祖ユークリッドがプロトレマイオス一世に言ったということば、(C)「学問に王道なし」が思い起こされます。科学技術がこれほど進歩しAIの時代が来ても、一人の人間が言葉を身につけ、知を鍛えるという挑戦に、王道はないのではないか。大村はこんな言い方をしています。

「きつと、ことばの力をぐんとつけたい、急にうまくしたい、そんな方法があれば教えてもらいたいと思っているでしょうが、なかなか、そういう急にばつと力をつける方法はないですね。だんだんに、そのかわり確かに、力をつけることを考えましょう」(『大村はま やさしい国語教室』)

言語能力を育て鍛える簡単な方法はない。たとえ権勢を誇ったエジプトの王が求めても、また、教室に電子黒板やタブレット端末が備えられても、そんな便法はない。そう見極めた上で、こつこつと丁寧に勉強していく。言語に関わる神経をしっかりと覚醒させた子どもと教師が、現実世界といきいきと重なることばを扱っていく。それが、迂遠なようでいて確かな言葉の教育ではないか——なんだか気が抜けるほど普通で当たり前ですが、でも本当のところではないでしょうか。

(鳥飼玖美子・荻谷夏子・荻谷剛彦『ことばの教育を問いなおす—国語・英語の現在と未来』ちくま新書 二〇一九年、一部改変)

(注) 大村はま(一九〇六—二〇〇五) 日本の国語教育者。常に実践をもって提案し続け、日本の国語教育を大きく発展させた。

【一】傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。(二点×五＝十点)

【二】二重傍線部(A)「大いなる弱点」とはどのようなことか。また、筆者はその弱点の原因はどこにあると考えているか。それぞれについて本文中の語句を用いて答えなさい。(八点×二＝十六点)

【三】二重傍線部(B)「大きな圧力」とはどのようなことか。本文中の語句を用いて答えなさい。(八点)

【四】筆者は、二重傍線部(C)「学問に王道なし」が思い起こされます」と述べているが、それはなぜか。本文中の語句を用いて説明しなさい。(八点)

【五】本文を踏まえ、「ことばを教える」ことについて、あなたの考えを二〇〇字以内で書きなさい。(二十点)

二〇二四年度 郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部 一般選抜試験Ⅰ期 個別学力試験		
氏名	国語	
志願番号		

得点

問題Ⅰ

【一】	【二】	【三】		【四】	【五】
		(一)	(二)		
①					
②					
③					
④					
⑤					

4点

8点

5点

3点

8点

10点

問題Ⅱ

【一】	【二】		【三】	【四】
	「大いなる弱点」とはどのようなことか。	弱点の原因はどこにあるか。		
①				
②				
③				
④				
⑤				

8点

8点

8点

8点

10点

【五】

20点

二〇二四年度 郡山女子大学・ 一般選抜試験Ⅰ期 個別学力試験	国語	氏名
志願番号		

二〇二四年度 郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部 一般選抜試験Ⅰ期 個別学力試験		
氏名	国	語
志願番号		
得 点		

問題Ⅰ

【一】	勤務					②	交差点		③	ふかん		④	特殊		⑤	せんでん		10点
【二】	(例) 見える人である筆者にとっては駅から研究室までの道順の一部である「緩やかな坂道」を、見えな い人である木下さんは俯瞰的に全体を捉え、同じ場所なのに「山の斜面」という全く異なる意味づけをし たから。(※同一内容であれば可)																	8点
【三】	(一)		(例) さまざまな視覚的な情報によって意識を奪われている「見える人」のこと。														3点	
	(ロ)		(例) 見ええない人(視覚障害者)が、自分が歩いているのはどんな地形のどのあたりか、俯瞰的に空間 全体をイメージすることができのに対して、さまざまな視覚的な情報が意識を奪うため、「見える 人」はそのようなイメージを持ちにくい。(※同一内容であれば可)														5点	
【四】	(例) 「見ええない人」が視覚以外から得られる少ない情報をもとに、得た情報を解釈し、頭の中で空間全 体をイメージするための余裕のこと。(※同一内容であれば可)																	8点
【五】	ア・ウ																	4点

問題Ⅱ	【一】	①		指針		②	ぜいじやく		③	貫		④	あいまい		⑤	手際		10点
【二】	「大いなる弱 点」とはどう いうことか。		(例) 理論と実践、抽象と具体の繋ぎが不確かであるため、優れた理論が優れた実践と成果に つながるという保証はないこと。															8点
【三】	弱点の原因は どこにある か。		(例) 言語を扱う力と態度の不十分さ、精度の低さ。															8点
【四】	(例) 望ましい結論が最初から期待されていて、子どもは期待された通りの抽象語を使って一般化しなけ ればならないという圧力。																	8点
【五】	(例) 科学技術が進歩してAIの時代が来ても、言語能力を育て鍛える簡単な方法はなく、こつこつと 丁寧に勉強していくしかないから。																	8点

問題Ⅱ

【五】											
		採点のポイント ・テーマ「ことばを教えること」に合った内容か。 ・常体と敬体が混在していないか。 ・話し言葉になっていないか。 ・へら抜き言葉、違かつた、「なので」始まり等 ・誤字／脱字はないか。 ・文字数は適切か。(一五〇～二〇〇字)									

20点

二〇二四年度 郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部 一般選抜試験Ⅰ期 個別学力試験		
氏名	国語	
志願番号		